

にしていくという社会変革の役割にある。

こうした取り組みを意図的に調整し、組織化し、全体化していくのがコミュニティワーカーとしての役割である。少数者の福祉課題を置き去りにしていないか、行政とキチツと向き合っているかを点検したい。

地域社会に意図的に働きかけを進めて変革を図り、「みんなが安心して住めるまちづくり」を進めたい。

繊細かつ大胆に、必然を生み出すための周到なプロセスづくり、これがコミュニティワークの手法だ。

しかし、こうしたコミュニティワークの手法が職人芸になってしまつて、後輩に伝えきれないという課題がある。これをなんとか形にしていく取り組みを進めたい。

山田さんの言葉で印象に残った言葉を最後に紹介し、彼女の提案の報告としたい。

○自分の頭で考え行動することが大事。組織の中の論議では、たくさんの話が展開し、それがあたかも自分の考えのように錯覚しがち。自分の力で、一人で考えることがとても大事。

○地域の人と一緒につくっていく、そのオリジナリティ(獨創性)が地域文化であり、それをつくっていくのが社協ワーカーの力量だ。

ローカル(地方)あつての全国。金太郎飴は錯覚の社会。ローカルが稀薄になればなるほど住民は住みにく

くなる。

○チャレンジが大事。うまく目標をクリアしている人のコツをつかもう。○素人職員さようなら、プロ社協職員こんにちは。

六つの分科会、一つの基礎講座

各分科会テーマを紹介すると、一、住民主体とコミュニティワーク「コミュニティワークとは何か、自らの言葉で表現しよう」

二、在宅福祉サービス「在宅福祉サービスとコミュニティワーク」

三、組織運営「さあ、社協を変えてみよう」

四、住民主体を貫き通す組織運営「住民主体を貫き通す組織運営」

五、権利擁護・自立生活を支える「ノーマライゼーションのまちづくり、できていますか」

六、評価・アピール「見えにくい社協から、社協活動を自ら評価し、アピールしよう」

七、NPO・市民活動団体との協働「OPEN」(社協を開こう！) NPOなどと協働するためのキーワード

となる。

それぞれのテーマが、今日、社協ワーカーをとりまく課題で埋め尽くされている。今やっている自分(社協のコミュニティワーカーとして)の活動は、これらの課題に即答できる状態にあるのか、もしかしたら、日々の業務に流され、介護保険導入に翻弄され、ワーカーとしての、理念やスタンス、その手法を忘れ、ワーカーが課題にすべきテーマを棚上げしているのではないか、そんなことさえ提起しそうな分科会で占められていた。



先輩ワーカーのこだわり活動に地域組織化活動原点を見た!

【第一分科会報告】

コミュニティワークとは何かを探ると共に、コミュニティワークを自分の言葉で表現できるようにしようという分科会。

全般は、先輩社協マン(二人)からの実践報告に基づき社協の活動とは、を考えるもの。

淡路島五色町の元社協専門員、事務局長をされていた佐山満夫さんの実践報告では、昭和四〇年台に、道路粉塵公害対策運動に社協が住民運動を組織化していく取り組みが紹介された。

社協が福祉分野でない取り組みをすることに抵抗はあつたものの、当時の時代背景や管理職の理解があり、大多数の住民の指示の中で、上からの圧力にも抗することなく、運動を成功に結びつけていった。その過程では、住民の組織化はもちろんのこと、具体的な調査活動が力となつたこと、マスコミの利用や広報活動の重要性、町・県行政へのアクションなどがダイナミックに展開された様子がうかがえた。

地域の多数者問題としての公害問題ではあるとしても、様々な圧力にもめげずに取り組めたのは、住民の支持があつたからと佐山さん。

取り組みの第一段階で住民懇談会の席上、「社協は福祉の問題をあれこれ協力してくれと言うが、私たちが今実際に抱えている粉塵問題は、どう考えるのだ」と問われた時、「行政と住民の間にある社協が、どっちつかずにいたら、どちらからも支持を失つてしまつていただろう」と回顧する。

社協は、どちらをむいて仕事をする業務なのか、をしつかり意識させる事例ではあつた。

兵庫県龍野市の元専門員の徳力美美子さんの事例は、二六年間の社協活動を通じた活動の姿勢論とも言うべきものだった。

ともかく地域に入り込み、地域の中から問題を捜し出してきて、実践に結びつける。それが運動としての展開であつたり、具体的なサービスの展開であつたり。

その動きは、行政をして、「社協ばかり仕事をしないで行政にも仕事をわけてよ」と言わせしめる言葉に表現される。

地域に入つていけばいくほど見えてくる取り残された社会的弱者(少数者)の課題が見えてくる。

そこに関わるワーカーには、「まわりの人(多数者)に問題意識を芽生えさせる役割を持っている。特に、政策決定の立場にある人をどう説得できるかはワーカーの力量が問われること」と鋭い。

「住民が行政に向かえるように援助していく(住民主体は)のが、社協の役割」、「新しいことをしていこうとする時には必ず抵抗を受ける。それを切り開いていくのがテクニク」、いつでも地域の実態をつかんで事例が取り出せるようにしておくことが力に、「困っている住民をみると、なりふりかまっておれない。社会を変え、問題を切り開いていくのが社協の役目」と社協活動の何たるかを、正義感と情熱、そして叫びで語ってもらった。

その彼女が楯を飛ばす。

- ①今の社協、ハングリー精神が欠けている。
 - ②住民主体をなくしている。
 - ③役場の下請けになっている。
 - ④施設に負けている。
- あなたは?

「デイベート」で

説明する力を

この技法は、仮想事例を設定し、対立する二つの側面にメンバーを分けて討論し合い、相手を説き伏せる力を獲得しようという技法。

例えば、社協への行政補助のあり方をめぐって、行政と社協の立場に分かれて、公衆の面前で討論し合うというもの。

今回の場合は、二つのテーマでそれぞれグループピングが行われ、行政対社協、社協対住民の設定で行われたが、いざいざも、その中心的な狙いは、社協のコミュニティワークをどのように説明し、説得するかということ。

当然のことながら対する側はその説得を否定し、納得しないで自分の主張をするというもの。

納得した方の負け、というのがこのデイベートの決まり。

社協のコミュニティワークのこれまでの積み上げが問われることになる。ともに、理論化はもちろんのこと、その必要を納得させるための資料や具体的な数値、事例が大きな力になることを感じさせられた。

具体的な今回のデイベートに関する報告は、紙面の都合上、想像にまかせ

ることとして、感想だけ述べたい。

社協のコミュニティワークは説明がしづらい。住民や行政にとって、社協の役割は、認識されにくいし、評価されにくい。予防的福祉、法外援護、福祉増進活動、福祉力づくり、福祉教育、福祉のまちづくり、ボランティア活動の推進といつてもピンとこない。

そこら辺りが今私たち社協ワーカーが直面している孤立化の課題であるようだ。

私たち自身がコミュニティワークを共有できずにいることが、今日の社協の存在意義の不安定化につながっている。そこを何とか解決していかなければ、と強く思った「つどい」だった。



全国組織化を

旗印に掲げ続けて

【全国連絡員会議報告】

連絡員制度が機能しておらず、全国

組織化に結びついていない、などとしてこの制度を廃止して会員制度への移行が提案された。

しかし、それでは、全国組織化の旗印が弱くなっていくのではないかと、といった意見が出され、再度検討して四月始めに提案をし直すこととなった。

社協という全国的な組織が、上から下への系列としてある中で、下から上に意思をあげていく社協の民主化運動に福岡も一緒に取り組みを進めたい。

「これでいいのか?社協」

太宰府市社協 古川 妙子

年明け早々、県社協より届いたFAXが、今回の全国社協職員をつどいへ参加するきっかけとなった。自主的に手を上げられたのは筑後市社協の中山さん。私は県社協の担当者へのせられて?参加することになった。大役を課せられたようで気が重かったが、最初で最後かな?と思うと「全国のうまいもの情報巡り」をして楽しんでこようと言う気は一転した。開催日は土日、とは言え我が社協は事業の積み重ねの日々、二人の遅い男性職員に後ろ髪を引かれながら、老体ノにムチ打って新幹線に乗った。一〇年振りの新神戸、震災のダメージすら見せない表通りの街並み。私の胸中で一瞬ホットするものがあった。会場には余裕をもって到着、前日から神戸入りしている筑後市社協の中山さん・野田さんと無事会う

ことができた。手渡された資料の中に今回の参加者名簿があった。北海道から九州まで二〇〇人程の名前が並ぶ。さすがに関西コミュニティワーカー協会主催だけあって関西勢はざらり、そんな九州は福岡県のみ、久留米市社協の三原さんを含めて四人の参加だった。福岡代表というより九州代表の四人になってしまった。ここで気になることが二つあった。一つは私の社協欄が大牟田市になっていたこと。もう一つは分科会が第二希望に変更されていたことだった。せっかくなまいもの情報を口にしてしまったのに、一変してまずく感じてしまった。ともあれ、私の我がままを余所に第六回全国社協職員をつどいーこれでいいの？ 社協ー自信をもって地域福祉を語ろうの幕開けとなった。

まず、関コミ協会の会長からーなぜ今地域福祉なのかー地域福祉においていろいろな立場に立たされる社協、その社協の主体制はどこにあるのだろうか。また、理想と現実をチェックする中でどんな仕事をしているのか。歩み続けざるを得ない社協。地域を動かすことのできるコミュニティワーク法など、関コミから投げ掛けられた課題は盛り沢山、分科会へのエンジンがスタートする。

分科会での団欒？私が参加した第六分科会は「OPEN」(社協を開こう！) NPOなどと協働するためのキーワードがテーマであった。団欒という

言葉がびつたりな程、参加者が二〇〇余人中の一人と、本当に和やかなムードの自己紹介からスタートした。

が、発表者(プロジェクト結ぶ)の代表世話人である石井布紀子さんの震災を機に今日まで活動し続けているボランティアと有償グループを取りまとめた体験談を聞くと、四年前のあの震災が現実のものとして甦ってきた。当事、震災のニュースに目や耳を傾け、現地への救済に関わった人々の数字は記録的なものとなった。でも私はその内の一人にはなれなかった。なぜなら、以前生活圏となっていた街並みが跡形もなく崩壊しているのを見るのが怖かった。目や耳を閉ざした弱虫な社協マンの自分がいたことを思い出した。石井さんの口から出る一言一言がその時の私へのメッセージではなく、今の私への問いかけのように響いてきた。介護保険制度を目前に震災を受けたかのように揺らぐ社協。いざという時の社協の力量は日頃の地域との関わり方で明確になるのだろうか。今までの社協が評価されるーそんな時期なのだろうか。

石井さんと言う人柄を背景に展開して行くプロジェクト結ぶ。震災復興まちづくりに貢献し、今も休むことなく歩み続けるエネルギーの源は何なのか。個性の強い一六のグループであり決して一つに成りきれない。だが、何にも負けない底力を持っているーこの不思議な生き物に感動した。参加者

はこの感動からテーマに添ったキーポイントのカード作成をし、二日目の宿題となった。

さあうまいもの情報食いの交流会
一番のメインとは禁句でしょうか。いえいえ関コミパワーの集結の場だと言っても過言ではないでしょう。

和洋中華、味付けも色々今まで味わったことのないメンバーの中、名刺と言う調味料が空になる程でした。

分科会が聞き足りなかったこと、伝えなかったこと、悩みやモヤモヤ、でも抱いている夢や希望などなど。

うまいもの情報で満腹になったような気がした。夜の街並みも以前と変わらぬ華やかさだった。もう四年？まだ四年の言葉が私の胸で一人呟いていた。酔い冷まし(?)のコーヒーを飲みながら「今日のこの関コミパワーを九州へ送り込みたい。」と中山さんは語ってくれた。私もこの感動を地元で伝え合いたい思いだった。そして、冷めやらぬ興奮を枕に夢路へとー。

ファミリーな分科会
さわやかな晴天の朝、分科会五人でスタート。ちよつと淋しい思いもあつたが、昨夜の「交流会」という隠し味でカバー出来たようだ。キーポイントのカードを項目で分類し、図表示にして行く。NPOなどと協働するため

のキーワードまででは行きつかなかつたのだが、社協を開くOPENな体制づくりとして「フットワーク・ネットワーク・コミュニティワーク」と言う

キャッチフレーズができ、大満足。
それぞれの思いが全体会へー
各分科会からの報告を受けて、多面的な角度から社協を見ることができたと思う。またそこにコミュニティワーカーとしての専門性の発揮できる社協職員が求められていること、地域福祉を原点とする展開の再認識など。ちょっと一味違った自分づくりが必要なのかも知れない。「さすがに社協職員」

終幕の記念講演
全体会の熱気が落ち着く中「医療からみた地域ケアの未来」(震災からの出発)というテーマで、医師 梁勝則さんよりスライドをおして講演を聞く。スライドには震災の生々しさと終末期の患者の穏やかな顔とが、交互に映し出された。死とどう対面するのか、在宅ホスピスケアの条件とは患者とその家族だけの問題ではないこと。地域福祉を根底とする医療側からの見方であった。誰にでもいつかは訪れる死という時をどう見つめますか？

二日間はアツという間に終わった。関コミのパワーと明るい笑顔をお土産に帰路につく前に、訪れたい場所があった。それは震災の時、高架部が崩れ落ち死者も出た阪急伊丹駅であった。子どもの手を引いて乗降した記憶が懐かしい限りだった。昨年の秋頃だろうか「福祉の駅」として報道された。百聞は一見に如かずの言葉通り、すごい感動が「やれば出来るんだ。」に変わった。バリアフリーとは違ったユニバ

ーサルデザインを取り入れているとい
うことだった。エレベーター内のゆと
りあるスペース。改札口の幅の広さ、
階段よりも緩やかな傾斜づくりーなど

「福祉の駅」の名に相応しい駅が誇ら
しげに見えた。駅の一角に社協の出張
所?のような所があったが、休日のせ
いか誰も居なくて詳しい話等は聞けな
かった。でも、当事者や住民が参加す
ることで変わるー変えられるの言葉を
現実の物として目の当たりにすると、
嬉しくなってしまう。でも、その背
景を忘れてはいけないのだー。

(みなさんも機会があれば、是非一度
訪れてみて下さい。)と、これで私の思
いがけない全国社協職員をつどい参加
の報告は終わりますが、いつの日か関
コミの風を九州は福岡から吹き込むこ
とが出来たらと望んでいます。

また、今回参加出来ましたことに心
から感謝しお礼申し上げます。

〜アツ、目からウロコが…

久留米市社協 三原 洋子

二月六日〜七日、神戸市で開催され
た、『第六回全国社協職員をつどい』に
参加しました。日頃より、他の社協職
員とのコミュニケーション不足を反省
している私にとって、これはチャンス
だと思ひ、すぐに参加を希望しました。
開催地が、震災後の神戸というのも私
にとっては、魅力に思えました。
というのも、神戸市に、震災遺児の

支援拠点として、今年の一月、「虹の家」
(レインボーハウス)が建設されたこ
とを知り、機会があれば、ぜひ訪問し
たいと思つていたからです。

この施設は、日本では初めての遺児
専門の癒しのダイケアセンターで、激
震の恐怖と同時に、最愛の親族との別
れを体験した子どもたちを支援する、
ボランティアと「あしなが育英会」の
スタッフを中心に、建設が進められま
した。

研修初日の午前中に、「レインボーハ
ウス」の訪問を実現させた私は、それ
だけでも神戸に来て良かったなあと満
足していました。しかし、それ以上に
充実していたのは、二日間を通して開
催された『全国社協職員をつどい』で
した。

私が参加した分科会は、経験年数が
三年未満の職員対象の基礎講座で、『社
協活動の醍醐味探求』というテーマで
した。四名の個性的かつ、有実力者の
先輩社協マンから、興味深い話がたく
さん聞けただけでなく、他の社協職員
の皆さんたちと短時間ではありましたが、
が、正直な気持ちを話し合い、交流す
ることが出来ました。

分科会を通して、私が学んだことや
再認識させられたことは、数多くあり
ます。例えば、

- ◎地域の中に入って行きたくても、
人と話をするのが苦手と言う人は、
活字(広報紙や新聞等)を使って、
地域の人たちとの情報交換やニー

ズ把握も出来るのでは?

というアドバイスがありました。苦手
だからと言って、その仕事を避けたり、
手を抜いたりせずに、自分自身を変え
る努力をして、自己改革して行くこと
が大切なんだなあ、と再認識しました。

また、ある先輩のお話からは、

◎社協というのは、地域住民の支え
によって成り立つ民間組織である
が、その事業内容は、公共性が非
常に高いものであり、そのことを
社協職員の一人ひとりが自覚し、
責任を持つて対応しなければなら
ない。そのためにも、行政とお互
いに理解し合えるパートナーにな
れるよう、実績と信頼関係を築い
て行かなくてはならない。

ということを学びました。このことか
ら、やはり、行政と社協はお互いに、
地域住民の福祉ニーズを把握し、その
解決へ向けての協力を惜しまずに、事
業を推進して行くべきだと思います。
また、本来、地域社会というのは、
自分たちの地域に起きている福祉問題
について理解し、解決するということ
が理想ですが、

◎地域社会が、自分たちで福祉問題
の解決が出来るように、社協が情
報提供や側面からのサポートをす
ることで、地域社会に力づけをし
て行かなくてはならない。

その点を考慮しても、

◎地域住民が学習したいとか、ぜひ
取り組みたいと思えるような「仕

掛け」をすることは必要であり、
常に自分たちで学習して、それら
に備えておくことは、当然のこと
である。

そして、この分科会のテーマであり、
最も私たちが聞きたかった、「社協活動
の醍醐味」とは、

◎地域の中へ入って行くことで、地
域の人たちから、様々なことを学
べるということ。このことは、地
域担当職員だけでなく、社協職員
の皆が意識しなくてはならない。
以上、私が印象深く感じた点を要約
したつもりです。

今回の研修では、チャンスがあれば、
また話を伺いたい、ヒントを貰いた
いと思えるような人たちに会え、また、
色々なことも考えさせられました。今
後の自分に大役立つ、充実したもの
だったと思っています。

地職連新旧会長

あいさつ

旧会長 荻田町社協 福山 直樹

悪夢の「繰上げ当選」を果たしたの
が四年前。他にもっとふさわしい専門
員がおるやないか。どうして俺なんか
にさせるの。」という気持ちを押し通す
具体的手段を持たなかった僕は、表面
上ほとんど無抵抗に会長職を受け入れ
ました。そして、二年後の改選時には、
何が何でも降ろしてもらおうと正面き

って抵抗したのですが、「根まわし」の絶体力をナメていたお蔭で、再選されるハメになり、連絡会の「押しつけ」の構造を再認識したわけです。

私が会長の役を引き受けた平成七年度当初は、まだ今ほど渦中の介護保険問題が表面化しておらず、「参加」を旗印に、行政責任が右下がり状態になる方向性が見え隠れしているような時期でした。その頃の社協と今を比べた時、介護保険への対応という直面する課題の違いはあるにせよ、本質的な課題は何ら変わっていない事に気づきます。

社協は一体どう生きようとしているのか。どう生きればいいのか。

「福祉活動専門員」の国庫補助金が打ち切りとなり、一般財源化されることとなりました。この問題については、市町村社協会長会と県社協会長及び地元社協会長の連名で、市町村長と市町村議会議長他関係方面へ予算確保の要望書を提出したことは周知の通りです。しかし、当事者である福祉活動専門員が構成員の大部分である「地職連」としては何のアクションも起こしませんでした。要望書に名を連ねていないことにも特段の意見も申し上げませんでした。この点について、久留米市の松尾誠次郎さんが書いている、お叱りとも嘆きともとれるレポートを読みました。読まれた諸氏も多いかと思えます。つまりこの問題は、単に福祉活動専門員設置の財源確保の問題にとどまらず、その専門員が中心となって取り組んで

きた地域組織化活動の評価そのものに関わる重要な問題です。コミュニティオーガニゼーションワーカーなど、偉そうに言っているけど「あんたたちの仕事は馬鹿にされているんですよ」「もっと怒るべきだ」とこういう内容です。このレポートを読んで「あつそう言われればそうだった」と自分の鈍感さにあきれたのが私だけであればいいのですが……。

曲がりなりにも会長の役にある僕としては、大変なショックでした。せめて、要望書に名を連ねるくらいのことを何故しなかったのか。今でも悔やんでいます。

この点ひとつとってみても、他の会員の叱りを覚悟の上で言うならば、社協の本質的な課題は、そこに働く職員の資質にこそ大きくかかわっているように思えるのです。

どうでしょうか？
中山会長率いる新体制がそのことにどう取り組んでいくのか。バイタリティあふれる中山会長だけに大いに期待しております。

新会長 筑後市社協

中山 陽一

社協発足以来、今日ほど社協の存在意義が問われ、社協が何をすることでか問われている時期はないのではないのでしょうか。また、今日ほどそれぞれの社協が孤立した状況もないのではないのでしょうか。

ことの発端は委託事業の受入れに始

まり、介護保険制度導入をどうするかという点に集約されてきそうに思えますが、それだけではないようにも思えます。

勝手ながら私論として県内社協の状況を四つの区分に分けてみますと、
①委託事業を受けてはいないが、事務局職員が少なく、福祉活動担当職員の業務が事務ワーク中心の活動となっている社協

②委託事業を受け、福祉活動担当職員がコミュニケーションに専念している社協

③委託事業を受け、介護保険事業の展開に、福祉活動担当職員の業務もその準備に重点的にシフトさせられている社協

④委託事業を受け、介護保険事業の展開とともに、福祉活動担当職員がコミュニケーションが連携方策を求めて展開している社協

〈総合型社協〉

あえてこの四つのパターンに分けて比較してみました。こういう分類が分断につながらないようにしたいものです。

ともあれ四つの分類のどれが良い、悪いという視点ではなく、こうした状況をどう考えるかが今、私たちに問われている問題ではないのでしょうか。もちろん、今日のこうした状況は、

全社協によるトップダウン方式の指導と方針転換による影響が大きいことはいうまでもありませんが、私たち自身の積み上げがどうだったのかという点がそれ以上に問い返されなければ、被害者意識が芽生えるだけで、何ら積極的な解決策は見えてこないように思います。

今、この四つのパターンを通して考えたいこととして、

一つは、脆弱な組織基盤、財政基盤に対して、それを改善する取り組みをどれぐらい真剣に取り組んできただろうかということ。それが、地域福祉の中核体といわれながら、十分な地域福祉活動で成果を上げきれないまま今日に至らした重大な要因となってきたのではないかと、ということ。

一つは、社協活動とは何か、その歴史を確認し、どういう活動をするのが社協なのかを確認する作業が不十分であったこと。特に、社協固有の活動手法といわれるコミュニケーションの積み上げが理論化・技術化されないうちに、活動が職人的な取り組みとなつてしまい、共有化できておらず、また伝えきれていないのではないかと、ということ。

もう一つは、介護保険事業の実施について、「利益性」を前提としたこの事業が「公共性」を基盤とする社協活動にどう位置づけできるのか、また、その持つ「個別援助」の取り組みが、コミュニケーションの「集团的・組織的

活動」にどのように組み入れられるのか、ということ。

これらの課題をどれだけ自分の問題、社協自身の問題として認識し、解決の取り組みを図っていくかに、今後の社協の未来が左右されてくるのではないのでしょうか。

社協を取り巻く状況は、既に、新たな展開も加わっています。在宅福祉サービス部門の「社協職員」の大幅な増員、国庫補助だった「福祉活動専門員」補助の一般財源化、NPO法、成年後見制度、社会福祉事業法の改正と考えるべき課題は多くあります。

これらの課題に流され続けるのではなく、積極的に論議し、共同して課題の解決に努力していくとともに、私たち自身の意思を内外に表明し、行動していきたいものです。

私は、これらの課題解決に向けて、以下の提案をしたいと思います。

一、各市町村社協が抱えているさまざまな課題点を集約・整理し、それぞれの解決策を検討したい。

特に、市町村社協の財政基盤の弱さについては、かつて社協の法制化運動の中でいわれていた国からの財政補助の実現が棚上げ状況になっており、こうした問題を率直に提起し、解決のための運動化を進めていく必要があると思っています。

一、社協のコミュニティワークについて研究する自主研究会を発足させたい。

これは、関西コミュニティワーカー協会の「全国社協職員のつどい」に参加して思ったことですが、コミュニティワークが持っている性格的なものは、報告に示しているとおおり、その性格や求められる姿勢論は各所に出てくるもの、その技術、手法といったものとしては、何ら示されていません。コミュニティワークの技術・手法を形にしていくのは、これからの私たちの重要な仕事だと考えます。

一、私たち市町村社協が抱えている課題や、意思を上部機関である県社協、全社協、その他に意思表示していく下からの意思伝達のシステムを作り上げていきたい。

私たち市町村社協は、これまで、全社協から流れてくる情報や指導を受けて実践に取り組んできましたが、それはややもすると市町村社協の実態を無視する形で流されてきていたのではないのでしょうか。それを端的に示しているのが、「事業型社協」の推進に示されているように思います。

これらの提案は、大きすぎると感じられるかも知れませんが、出発点は自分の社協からと考えれば、決して大きな提案ではないと考えます。

編集後記

まなこ編集委員長

小石原村社協 和田 博

まなこ44号の発行が遅れ、45号との合併号として発行致しました。44号に原稿をお寄せいただきました方々、また地職連合会の方々に大変御迷惑をおかけし、お詫び致します。

さて私こと、二期四年間まなこ編集委員を務めさせていただき、二期目は、編集委員長として編集作業に携って来ました。

毎回のことながら編集委員会では、「次号の特集は何にする」とか、「連載は、「フリートークは誰にお願いする」等、決めることが多くなかなか話が前に進まず、時間だけが過ぎることが多かったように思います。特に毎回の特集では、なかなか良い企画が浮かばず編集委員一同頭をかかえたものです。

「あつ」そう言えば、今回のまなこフリートークの中で、以前編集委員長をされていた浮羽町の松岡さんがおもしろい事を書いていたぞ、「各ブロックの編集委員さんの社協におじゃましての編集作業・毎回環境が変わり、地元のおいしいお昼も食べられ、社協の震囲気も味わえ、楽しく作業出来た」「しまった。」もつと早くに松岡さんに原稿お願いすれば良かった。新しい編集委員になられる方々、参考にしてみたいかがですか。

ところでみなさん、「まなこ」ってど

ういう意味があるか知っていますか。私も編集委員をしながら標題の「まなこ」って、どういう意味があるのかなと思っていたところ、ある編集会議の折に連絡会よりいただいた資料の中に次のように書かれていました。

「まなこ」とは、「眼(まなこ)」という意味を持つ、つまり一つの考え方にとらわれることなく、様々な「視点」を持つことが地域福祉活動を展開する上で不可欠であるという考え方、あるいは実態、政策、運動と自分自身のあるりよう・実践を「凝視」する媒体でありたいという思い入れからこの標題がつけられた。そうです。ちなみに創刊号は、昭和49年4月に発行されました。

みなさん「まなこ」読まれていますか。机の隅に置きざりにされていますか。なかなか枠から外れることが出来なく、毎回同じような企画になってしまいました。連絡会自体専門員連絡会から地域福祉活動職員連絡会へと改組されましたので、「まなこ」もそれに合わせ改善の必要があるのではないかと思われます。新編集委員のみなさん期待しています。

今後も単なる広報誌ではなく、会員ひとり一人に何か問題提起が出来るような「まなこ」であって下さい。

最後に、まなこ発刊にあたり多くの方々より原稿をお寄せいただきありがとうございます。編集委員一同お礼申し上げます。次号より担当されます新編集委員のみなさん頑張ってください。

